『宇宙意志』を生きられた河波上人（二）

島根県立大学短期大学部名誉教授　江角弘道

V．大宇宙と阿弥陀如来の相関・共鳴関係

河波上人は、著書：如来光明礼拝儀講座の中で、「大宇宙と阿弥陀如来の相関・共鳴関係」を詳しく説かれています。その本の中から、説明箇所を取り出して、物理学との関連で考察いたします。

1、大宇宙に目覚めること

「人間の存在は、それ自体不思議ともいうべき他はない。その価値ある存在であることは、いくら高く評価しても評価しすぎることはないであろう。しかしながら、だからといって人間はそれ自身が他から切り離されて、それ自身としてだけで偉大であるというのではない。

その人間とても、実は最初から存在していたものではなく、数百億年の大宇宙生成のプロセスの中から、ただ奇蹟ともいうべきほかもなく出現してきたものなのである。むしろかかる人間を生むにいたったこの大宇宙こそ、不思議の極みというほかはないであろう。現在、その大宇宙は、ほんの一部、人知の考察の対象、すなわち自然科学の対象となりうる一面が考えられるのみである。しかしながら全体として宇宙そのものは、限りなく人知を超絶している。そしてただそこからわたくしたち人間の生命そのものが、どこまでも価値ある、高貴なものとして成立し来たっているのである。

わたくしたち自身も、近代におけるように人間を孤立的に、固定的実体的に考える立場から解放されて、その眼をむしろわたくしたちの生命の根源たる不可思議の極たる大宇宙に限りなく開かしめることが必要であろう。そのことによって、かえって人間みずからの真実のすがたに目覚めることができるのである。

（途中略）

このように人間はどこまでも人間を超えた存在（大宇宙）そのものとの関わりなくしては考えられず、その関わりの中で人間本来のすがたとその意義に気づいてゆくことにもなるのである。」（56～57頁）

2、超在一神教的汎神教

「私たちが信仰する阿弥陀如来は、どこにも在すが、また、どこにも在さない、ともいえる。すなわち、私たちの信仰心に対応して、そこに如来は現前したまうが、信心なきものには、たとえ如来は在しても、在さぬに等しい。

あたかもプラスとマイナスの、二つの電流が交流して、電気自体の生起を見るようなもので、マイナス（私たちの信心）の電気の起こっているとき、そのことに気づこうと気づくまいとにかかわらず、すでにそこに厳然としてプラスの電流（如来力）が作用しているのである。否、マイナスの電流（私たちの信心）が起り来ること自体が、すでに如来力としてのプラスの電流のはたらきかけあってのことといえよう。実に如来の久遠劫来の衆生への念いが、私たちの信心となり、念仏ともなってゆくのである。そこには如来と私たちとの間に、甚深なる縁起の世界が在しているのである。

それゆえに、私たちの心の中に起ってくるところの如来への信心、ないし想念は、たと

え私たちの日常平生の妄念と等しくする心の地平から起ってくるところの念であっても、それは、如来心との相応において、如来心から起ってくるものゆえに、単なる妄念の地平を限りなく超絶している。私たちはかかる如来への信、想念において、自己自身を限りなく超出し、仏の世界へと帰入してゆくことができるのである。「観無量寿経」における。「心に仏を想うとき、この心、仏を作る。この心、是れ仏なり」とは、まさにかかる消息を示すものなのである。」（105～106頁）

この法話における電流の考え方は、物理学で定義されている電流とは、異なっています。物理学で電流というときは、プラスまたはマイナスの電荷を持つ粒子の流れをもって定義しています。従って、物理学的には、河波上人の言われる「マイナスの電流」も「プラスの電流」もありません。河波上人の話の内容は、光子（ひかりそのものである。）がある空間の1点で消滅し、電子（マイナスの電荷を持つ粒子）と陽電子（プラスの電荷を持つ反粒子）が対生成する素粒子物理学の実験事実に類似しています。ひかりは、空間を進行しているとき、突然に粒子と反粒子に生まれ変わるという対生成の現象を起こすのです。それは逆も真なりで、粒子（マイナスの電荷を持つ）と反粒子（プラスの電荷を持つ）が出会うと瞬時にひかりになるのです。これを対消滅といいます。これに河波上人の言葉、「マイナスの電流」と「プラスの電流」を「粒子」と「反粒子」に置き換えてみれば、『粒子（私たちの信心）と反粒子（如来力）が出会えば、ひかり（無量光）となる。』と読みとることができるのです。すなわち自然界そのものの仕組みが法界そのものの仕組みと類似している現象です。

さらに、河波上人は、宇宙の仕組みについて「このようにして、私たちの信心は超越的にして内在的、内在的にして超越的ということができよう。しかしながら、このようにして私の心の中に起り来る信心の仕組は、実はそのまま宇宙そのものの仕組（法界の真相）から由来しているのである。私たちが、一見、主観的な心のいとなみとも思われる宗教的行為も、実は宇宙論的な出来事なのである。それはまさに法然上人のいわれる「自然法爾（じねんほうに）」の世界の事柄にほかならない。（途中略）

ところで、かかる私たちの信心を成り立たせているところの、宇宙の構造、ないし法界の真相とは、いわゆる弁栄聖者の説かれたところの「超在一神的汎神教」の世界にほかならない。（途中略）むしろ宇宙の真相としては、必然的に超越即内在としての超在一神的汎神論としてのあり方以外には、考えることができないのである。」（106～107頁）と述べられています。

3、如来の遍在と現前

「わたくしたちが至心に帰命し、帰依礼拝し奉るところの如来は、実に宇宙に遍在し、あらゆる処に滲透し、充満して在します。それゆえにまた、わたくしたちの現前にも身近に在すのである。そしてまたかえってそれ故に、わたくしたちの身近に在す如来が、実に久遠劫の過去から宇宙に遍満するところの如来であったことにも気づかされてゆく。そのような内容は、大乗仏教の宗教形而上学の根源的構造から由来しているのである。

大乗仏教の菩薩たちは、現前する仏身に帰命し、それへと想念を集中することによって、その三昧の中で、遍在する仏身に目覚めていった。そしてかかる遍在する仏身に目覚めて見れば、現前する仏身は遍在する仏身のあらわれであることにも気づいていったのである。」（70～71頁）

「如来の光明は宇宙（十方世界）に遍在し、遍照しているものゆえに、わたくしたちは、いつでも、どこでもこの光明に出合っていたはずなのである。いわば、常に出合っていながら、少しも出合っていない、というのが現実のわたくしたちのあり方といえよう。

そのありさまを、たとえば、大徳寺開山の大燈国師（1282～1337）も、次のように偈文で述べている。すなわち、

億劫相別而須臾不離
尽日相対而刹那不対

（億劫、相い別れて、而も須臾も離れず、尽日〔一日中〕相い対して、而も刹那も対せず。）

右の偈文の趣旨は、念仏門の上でも同様で

あろう。尽日、あい対して、しかも刹那も対しないのは、ひとえにわたくしたちの煩悩の深きによるのである。とはいえ、億劫、あい別れて、実は須臾も離れているわけではないので、光明とその当体たる如来の現前を信じて念仏する時、直下に感応道交ができてもゆくのである。」（134～135頁）

「ここで法界身とは、法界（大宇宙）が、そのまま身体である（それゆえ宇宙身 cosmic body とも称せられよう）ところの阿弥陀仏の当体にほかならないが、まさにかかる法界身が、わたくしたちの心の中に入ってくる、というかたちでわたくしたちの心そのものが宇宙身（心）となり、宇宙大に開かれてゆくことを意味しているのである。」（137～138頁）

Ⅵ．河波上人の説かれる『宇宙意志』

河波上人は、著書：如来光明礼拝儀講座の中で、『宇宙意志』を説かれています。

宇宙意志（ヒトがこの世に生まれてくる根源の力）について、初めて言及したのは、弁栄聖者であると次のように、指摘されています。

「法然上人が主張せられた「選択本願」の思想を弁栄聖者は更に宇宙論的、そして科学的視野に拡大して、私たち現代人に圧倒的な説得力をもって示されている。

弁栄聖者によれば、

「選択とは、衆生雑多の中からその理想に適った物を選び取って適せぬものは捨てることである。その選択は、大自然の中に、一切生物にも行われている。」（『人生の帰趣』133頁）

と論じられるのである。（途中略）

すなわち選択本願とは、一見、外からはたらきかけてくるかの如くに見えて、実に私の内からはたらいてもいたのである。そして一応は外からはたらきかける宇宙真如力を本願とすれば、内からはたらき出してくる宇宙真如力を菩提心と称していたのである。しかながら本願力と菩提心との両者は、二にして一なるものである。」（450～451頁）

「大宇宙は、数十億年、否数百億年の巨大な営みの中に不断の活動を続けている。そして無数の星が誕生し、生成し、消滅してゆく。私たちの住むこの太陽系宇宙にしても百数十億年を経過し、今日に至っている。その間にその中の星たちはただ決められた軌道を限りなく回転しているだけであるかのようである。

そして地球も又そうであるが、やがてその地球上に生命が発生し、高等生物が進化し、終に人間が誕生した。それは不可思議の極みとしかいいようがない。一見、無機的な星の運行の中にも『宇宙意志』ともいえる不思議なはたらきが、数十億年、数百億のいとなみの中にはたらいていたとしか考えられない。

近代思想は宇宙の中に、そのような目的意志のあることを排除してしまったが、それにもかかわらず弁栄聖者はそのような近代の一般的な趨勢の只中にあって、

「宇宙には大法をもって万物を規定すると共に、大勢力ありて一切万物を劣等の状態より進化し向上せしめたる終局は、永恒の大生命、完全円満なる真善美の極に到達せしむる大霊力の存在を信ず。」（『人生の帰趣』七頁）

と仰せられている。

それは時代を超えた疑いようのない厳然たる事実なのである。それはいわゆる「帰趣」とも称すべき宇宙そのものの意志を前提としてのことにほかならない。

しかも大切なことは、その巨大な『宇宙意志』が、実に私たち一人ひとりの生命の末端にも充満してはたらいているということである。

しかしそのことに私たちは気づかない。しかし私たちの内に伏在するその宇宙意志に気づく時いわゆる菩提心に目ざめることになる。それはやめんとしてやめることのできない根源的意志の発動そのものなのである。」（449～450頁）

Ⅶ．まとめ

河波上人は、平成19年の「法のつどい」の法話の中で、「これからは、科学で『光明主義』を説くべきである。科学については、宇宙論（マクロコスモス）と遺伝子等の研究（ミクロコスモス）とを一つの連関性において捉えることが重要である。細胞の中の遺伝子一つ一つに「選択本願」が働いてきています。」と語られていたことを懐かしく思い出します。その時

に、白板に天の川銀河（注）の断面図を描いて、「ここに地球があるんですよ。宇宙のすみっこにあるけど、念仏している時は、いつも宇宙の中心にいます。念仏してゆくと、私自身がなくなり、全宇宙に広がってゆきます。」と話されました。　河波上人は、仏教に科学をも取り込んで、宇宙的視野で考察され、「私たちが仏の教えに目覚めるとは、この大宇宙の『宇宙意志』に目覚めることである。」と考察されていました。

　その考察の根本は、弁栄聖者の「選択本願」の捉え方にあると考えられます。弁栄聖者は、その著書「人生の帰趣」の中で、「選択本願」について、

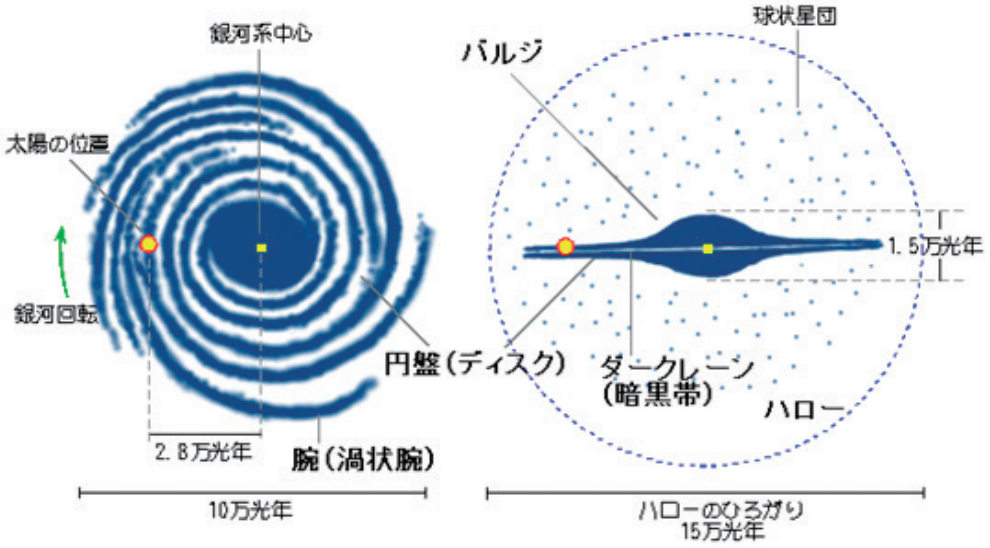
「大霊（阿弥陀仏）が自己の目的に摂取するに選択の理法がある。・・・其の選択は大自然の中に一切生物にも行われて居る。・・・もと同一の根本より出た生物なれども正当に進みたる物が人間である」（133頁）

　ここには、進化論を含んで、宇宙論的な視野があることを読み取られ、そこから現在の最先端の宇宙物理学や遺伝子等の研究の立場と共鳴してゆかれたと考えられます。

　科学においても、大宇宙が何故存在するか、ということ自体、不可思議であり、その中から人間が誕生してきて、宇宙真如力（宇宙の根源的意志の力・本願力）により、『宇宙意志』に目覚めることは、不思議中の不思議であります。

南無阿弥陀仏

注：天の川銀河について



天の川銀河の概念図（国立天文台、天文情報センターより）

　地球は太陽系の一つの惑星です。太陽系は、天の川銀河の中心から外れたところにあり、秒速300キロメートルのスピードで中心のまわりを2億5000万年かけて回っていると言われています。この宇宙には天の川銀河のような星々の集団が少なくとも1千億個ほどあると見積もられています。天の川銀河は渦状型をしていますが、銀河には棒状、楕円状、球状、棒渦状などの形のものがあります。

　遙かに想像を絶するこのような大宇宙が、大霊大法の顕現であります。弁栄上人は「宇宙全体が法身の体である。故に宇宙は絶対の大霊、永恒に活ける如来である。哲学では実体または真如等と呼んでいる。」と述べられています。大霊は宇宙の大法を以て万物を統一摂理すると言われています。

参考文献

1）河波　昌著、「如来光明礼拝儀講座」、光明修養会、1999年

2）辨榮聖人遺稿要集、「人生の歸趣」、光明修養会、2004年

3）桜井邦明著、「宇宙には意志がある」、クレスト社、1995年

4）桜井邦明著、「命は宇宙意志から生まれた」、知致出版社、2010年

5）河波　昌著、「光の現象学」、ミオヤの光社、2003年